

Symposium III: 鄭振鐸『中国俗文学史』とその後

—歌謡と説唱研究の展開と課題—

近百年の中国歌謡研究

大木 康

周作人、沈兼士らによって北京大学歌謡研究会が正式に発足したのが1920年、その機関誌『歌謡』が発刊したのが1922年であった。それから今日まで百年の月日が過ぎた。本発表では、この百年の中国歌謡研究の流れを概観し、残された課題についても考えてみたい。歌謡研究には、口頭で歌われる歌の採集・研究と、俗曲唱本など文献資料の収集・研究との二つの側面がある。

歌謡研究会初期の主要メンバーの一人であった顧頡剛は、生まれ故郷である蘇州で歌われていた歌謡を集め、1926年に『吳歌甲集』、1927年に『吳歌乙集』を刊行する。歌謡の採集は、その後、鍾敬文ら広州中山大学の民俗学会によって引き継がれる。

歌謡採集を最初に立ち上げた劉復（半農）の教え子である李家瑞は、1931年に『中国俗曲総目稿』、1933年に『北平俗曲略』を刊行し、こちらは主として歌謡・俗曲の文献資料の収集と整理の作業をリードする。この資料は台湾の中央研究院に運ばれ、曾永義らによって目録が作成され、やがて2001年以來『俗文学叢刊』として刊行される。1929年には、姚逸之『湖南唱本提要』が刊行されている。

1934年、安徽において馮夢龍『山歌』の版本が発見されると、1935年には上海の伝経堂書店から顧頡剛の校訂による排印本が刊行される。明末の蘇州方言で記された『山歌』については、その後、多くは海外において翻訳、研究が行われた。

1935年には鄭振鐸の『中国俗文学史』が刊行されており、ここでは主として文献資料により民間の歌曲などについても論及されている。

中華人民共和国の成立後、延安時代にはじまる歌謡採集が続けられ、「民間文学」「民間歌謡」の枠組みにおいて、『中国民間歌曲集成』等として大成される。1985年、姜彬『論吳歌及其他』なども中華人民共和国成立後の成果である。いわゆる改革開放後には、外国人による現地調査の成果である、Antoinet Schimmelpenninck, *Chinese Folk Songs and Folk Singers*, 1997などの仕事もあらわれている。

元代散曲は文学史上どのように位置づけられるのか

小松 謙

「漢文・唐詩・宋詞・元曲」と並称されるように、元代の曲は中国文学の中でも最も重要なものの一つに数えられる。今日では「元曲」といえば元雜劇を連想することが多いが、少なくとも明代前半までは、「元曲」として重視されていたのは、演劇以外の場で歌唱されていた散曲であった。金元期に急速に広まった曲は、詞にかわって知識人が創作する歌唱するための文学作品の主流を占め、当代を代表する文学と評価されるに至った。

では、曲はなぜこの時期に多くの知識人によって作られ、詞に取って代わるに至ったのであろうか。また、特に高級知識人を中心とする作家たちにより、詞の亜流ともいべき文雅な散曲が作られる一方で、詞とは全く性格を異にする白話を多用した新しいタイプの作品も出現し、その中には鋭い社会批判を含む作品が多く認められることは、『中国俗文学史』以来、これまでしばしば指摘されてきたところである。しかし元代散曲の圧倒的多数は文雅な作に属する。これらの作品は本当に詞の亜流なのか。また文雅な作と白話を多用した作とは全く性格を異にするものなのか。

本発表では、元という時代との関わりを踏まえつつこれらの問いに答えることにより、元代散曲の性格を明らかにし、元代散曲が中国文学における大きな転換点となる存在であり、白話文学のみならず、伝統詩文にまで強い影響を及ぼしていったことを示すことにより、これらの作品群を文学史上に位置づけることを目指す。

詞から曲へ—その境界をめぐる諸問題—

藤田 優子

楽曲の旋律に合わせて言葉をうめていく歌辞文芸の一種「詞」は、もともとは民間の歌謡などに起源を持つとされ、北宋・南宋期において芸能に取り入れられたことはもとより、知識人の間でも一時代を代表する文芸ジャンルとして発展した。詞の製作は元明期にも継続されたが、これと並行するように元代においてはやはり歌辞文芸の一種である北曲が流行し、また主に南方を中心とする地域では宋元期に醸成された南曲が明代に至って花開いている。南北曲も民間歌謡などから出発し、芸能、とりわけ演劇と深く結びついて多様な人々の間で受容されていたことはよく知られる通りである。

詞は宋代に、北曲は元代に、南曲は明代にそれぞれ文学的隆盛をみたが、一方でこうした歌辞文芸が受容当時においてどの程度明確に区別されていたかという点には測りがたい部分も存在する。従来指摘されてきた事例、たとえば詞の選集に北曲が混入すること、詞や南北曲の旋律を表す詞牌・曲牌に共通の名称が現れること、南北曲において頻用される套数という形式、ひいてはそこに見られる楽曲構成のパターンが宋代の芸能にも存在することなどは、詞・北曲・南曲が一定の関係を有しつつ併存していたことを示唆している。三者は交替的に盛衰を繰り返してきたように見えるが、実際には互いに接点を持ちながら共時的に展開してきたものと考えられる。

本報告では、以上のような観点にもとづいて個々の作品や受容の様相などの事例を取り上げ、詞・北曲・南曲といった区分では語ることのできない領域を示すとともに、その意味について検討を行う。

小説・戯曲・説唱を貫くもの—伍子胥の物語を例に—

上原 究一

鄭振鐸『中国俗文学史』は、「俗文学」を「詩歌」「(白話)小説」「戯曲」「講唱文学」「遊戯文学」の五種に分類した上で、小説と戯曲については紙幅が膨大になりすぎるとして割愛し、残る三種について詳述する方針を採った。もともと、当時の白話文学研究の主たる対象はやはり小説と戯曲であったし、その傾向は今日も変わってはいない。

とはいえ、白話文学においてはジャンルを超えて題材が共有され、長い時間を掛けて相互に影響を与え合いながら物語やキャラクター像が膨らまされてゆくの常であった。そのため、元の平話や明清の白話小説、或いは元明の雑劇や明清の伝奇には、宝卷や弾詞や鼓詞や子弟書といった「講唱文学」、即ち説唱にも同じ題材を扱う作品が見つかることが多い。それらも視野に入れなければ白話文学全体を通したその題材の全貌には迫れないし、作品間の共通点や相違点を洗い出すことで個々の作品の特色も見えやすくなる。従って、この100年の小説や戯曲の研究においても、説唱作品への目配りは折々になされて来た。

本発表では、そのような視点から説唱作品が研究対象に含まれる一例として、伍子胥を主人公とする物語を取り上げる。伍子胥の物語は、敦煌文献の「伍子胥変文」、雑劇「十八国臨潼鬪宝」や「伍子胥鞭伏柳盗跖」、明伝奇『挙鼎記』、明代の章回小説『列国志伝』の一部分、清代の鼓詞『左伝春秋』など、幅広い時代に渡る多くのジャンルで描かれていることがかねて知られていた。そこに加えて、『新刻彙正十八国鬪宝伝』と題する明刊の白話小説が2021年に古書市場に現れ、その存在が初めて学界に知られることとなった。発見されたのは残念ながら巻中のみの残本なのだが、この作品が歴代の白話文学における伍子胥の物語の演変の中でどのような位置を占めるのかや、巻上や巻下でどのような物語が展開されていたのかなどの問題を、各ジャンルの諸作品との比較を通して考えてみたい。

『金瓶梅』と芸能—引用と上演描写—

田中 智行

『金瓶梅』はリアリズムの文学と目され、芸能描写に関しても現実の上演風景を彷彿させる箇所は多い。戯曲や宝巻の上演描写は具体的だし、第35回では歌手が原籍地の流行曲を歌う。妓女が宴席で歌い、高官の集まりで役人賛歌が歌われるのもほぼ現実の風景であろう。俗曲はしばしば曲選からそのまま引用され、『詩林摘艶』などを参照していた痕跡がある。ただし上演形態が現実的である場合にも、小説の展開を予告したりその場にいる人物を批判したりする内容の作品が上演されるなどの作為は見られる。こうした現実的な上演形態が多い一方、あきらかに非現実的な歌唱シーンもある。西門慶が唐突に歌い出す第20、79回がとりわけ印象的であるが、いずれも歌手などが歌う場合のように「唱道」の後に歌詞が続くのではなく「有〇〇為証」（〇〇は曲牌）と導入されており、書き手には西門慶の歌唱を描いたとの意識は希薄で、台詞の内容を歌に仕立てたという方が実情に近かったと思われる。西門慶の独唱はこの二例に過ぎず、どちらも極度に感情の高ぶった場面に置かれるが、澁刺とした台詞を得手とする作者がわざわざ台詞を歌にしたのは、本来そこに読まれるはずのリアルな台詞からのズレに主眼を置いた、読み物としての表現なのであろう（ただし同時代に受け入れられなかったのか後の改訂本では削られている）。以曲代言を手法のひとつとして局所的に用いる態度は、例えば「快嘴李翠蓮記」のような主人公が始終歌っている初期白話短篇と同列には論じられない。こうした芸能に対する親疎相半ばする態度は、いっけん風雅な書斎にかかる対聯が俗曲に由来していたり（第34回）、歌の途中で双行で聞き手の反応が描かれ、果ては聞き手が別の曲を歌い出す（第52回）といった表現にも通じていよう。芸能に淵源する白話小説の書き手が、芸能テキストやその書きぶりを表現材料として捉え直したとき何が起こったのか、実例に即して検討したい。

清代四川・湖南唱本の時代的展開とその意味

岩田 和子

1932年に『中国俗曲総目稿』（河北、江蘇、広東、四川、福建、山東、河南、雲南、湖北、安徽、江西を中心に各地の唱本6,000余種を整理）が刊行されて以降、とくに近年になり、中国国内外に散在する唱本の発掘、整理研究が活発に行われている。

本報告で中心的に取りあげる湖南唱本と四川唱本は、現存するテキストから、清の嘉慶・道光年間にはすでに民間書肆で出版され、光緒年間から民国期にかけて盛行したと推定される。また、当時の民間に広く流布した説唱、戯曲、歌謡類の様相をうかがうことができる貴重な資料と考えられている。

従来の研究として、湖南唱本についていえば、姚逸之（1929）『湖南唱本提要』が最も早い時期のものであり、次いで張継光（1998）は、北京の瑠璃廠で購入した湖南唱本150種を整理し、それらを「説唱類」「戯曲類」「山歌類」「小調類」「其他類」に分けて目録を作成し、湖南の戯曲や曲芸の演目との関わりを調査し、その後、『光緒主遊長安』に関する研究（2015）を発表した。最近では、謝玉芳（2008）、張春曉（2020）、王安東（2020）による、国立中山大学人類学部、ライデン大学アジア図書館、山東大学図書館所蔵の湖南唱本目録や提要等がある。

四川唱本については、劉效民（2005）による、中国国内の各機関に収蔵される四川唱本約1,600種を整理し、版本の特徴、書肆の活動状況、出版業界や芸能の発展等における資料的価値の分析および目録の作成を行った網羅的な研究がある。一方、黄仕忠（2005）「雙紅堂文庫蔵清末四川「唱本」目録」の発表を機に、中国国内ではとくに雙紅堂文庫所蔵の四川唱本に対する研究が継続的に行われている。そのほか、湖南、湖北、四川、雲南、貴州唱本を「南方唱書」として、内陸部の唱本に着目した、于紅（2016）による整理研究もある。

以上を踏まえ、本報告では四川・湖南唱本に関する最近の研究動向を確認しながら、今後の研究課題について触れる予定である。